

第8章

子どもの生活時間に与える母親の影響

佐藤 香 (東京大学教授)

【要旨】

子どもたちの生活時間と親との関係について、母親の学歴と就業形態、および子どものディストレスに着目して分析を行った。学校段階が上がるにつれて、時間の使い方についてのルールを定めている親子は少なくなる傾向にあるが、母親が高卒までの学歴の場合には、ルールを緩和していく傾向がより明瞭である。また、就業形態については、学歴との関係ほど明らかではないが、専業主婦でルールを定めている比率が高くなっていった。学校段階が上がるにつれて、母親の学歴によって平均時間が異なる活動の種類が増加する。とくに高校生では、短大・大学卒の母親を持つ子どもでさまざまな学習にかかわる活動の平均時間が長くなっている。母親の学歴と子どものディストレスについては、「忙しい」と「肩がこる」では短大・大学卒の母親を持つ子どもで該当する比率が高く、他の項目では高卒までの母親を持つ子どもで該当する比率が高くなっている。ただし、母親の学歴が直接的な効果を持つわけではなく、他の要因をコントロールした分析が必要である。

はじめに

本章では、子どもたちの生活時間と親、とくに母親との関係に焦点をあてる。生活時間のパターンは教育と密接にかかわっている。例えば、教育の観点から提唱されている「早寝早起き朝ごはん」などは、まさしく生活時間についての提唱であり、家庭における生活時間パターンと教育とが重要な関連性を持つことを示している。

家庭での教育については、多くの研究蓄積があるが¹⁾、これらの先行研究は父親以上に母親が重要な役割を果た

していることを明らかにしている。神原・高田(2000)では、とくに母親の学歴によって、教育観や教育投資行動が異なると指摘している。一方、本田(2004)では、母親の就業状態が子どもに対する教育態度の違いに結びつくとしている。これらをふまえ、本章では、母親の学歴と就業形態を中心として、分析を進めていくこととする。

第1節 母親の学歴と就業形態による時間ルールの有無

まず、母親たちの学歴と就業形態について概観しておきたい。学歴については、「高卒まで」「短大・大学卒」の2つに分類した。就業形態については、「常勤(毎日、朝から夕方まで働いている)」「アルバイト・パート(時間を決めて働いている)」「専業主婦(いつも家にいて家族の世話をしている)」の3つに分類した²⁾。

「短大・大学卒」である母親の比率をみると、小学生50.1%、中学生47.2%、高校生44.1%となっている。就業形態については、小学生ではアルバイト・パート

42.9%>専業主婦29.4%>常勤27.6%、中学生ではアルバイト・パート43.1%>常勤31.8%>専業主婦25.0%、高校生ではアルバイト・パート44.4%>常勤33.9%>専業主婦21.8%である。どの学校段階でもアルバイト・パートがもっとも多く、小学生では専業主婦が常勤をわずかに上回るが、中・高校生では逆転して常勤のほうが多くなっている。現代では、専業主婦の母親は少数派であると言える。

表1 母親の学歴と就業形態

(%)

学校段階	母親の学歴	就業形態		
		常勤	アルバイト・パート	専業主婦
小学生 (2,265)	高卒まで	28.3	45.9	25.8
	短大・大学卒	26.9	40.0	33.1
中学生 (3,059)	高卒まで	32.5	44.0	23.5
	短大・大学卒	31.1	42.2	26.7
高校生 (2,277)	高卒まで	33.4	48.0	18.6
	短大・大学卒	34.4	39.9	25.7

注1 母親の学歴については「お母さん（またはお母さんに代わる人）は大学や短期大学を卒業している」に○をつけた場合には「短大・大学卒」、そうでない場合は「高卒まで」とした。

注2 就業形態については、「その他」「無回答・不明」を除外して分析した。

注3 ()内はサンプル数。

注4 高校生は高1～3生。

表2 母親の学歴と時間の使い方についてのルール（ありの比率）

(%)

学校段階	母親の学歴	男女計	男子	女子
小学生 (2,369)	高卒まで	57.8	65.0	51.9
	短大・大学卒	59.5	66.7	52.8
	全体	58.6	65.9	52.3
中学生 (3,227)	高卒まで	44.7	52.7	38.3
	短大・大学卒	49.6	56.7	43.6
	全体	47.0**	54.7	40.8*
高校生 (2,378)	高卒まで	30.8	34.5	27.8
	短大・大学卒	37.2	40.0	34.7
	全体	33.6**	37.1*	30.7**

注1 母親の学歴については「お母さん（またはお母さんに代わる人）は大学や短期大学を卒業している」に○をつけた場合には「短大・大学卒」、そうでない場合は「高卒まで」とした。

注2 性別が「無回答・不明」を除外して分析した。

注3 「時間の使い方についてルールを決める」の設問に対して、「よくある」「ときどきある」を「あり」に、「あまりない」「まったくない」を「なし」として分析した。

注4 ()内はサンプル数。

注5 **p < 0.01, *p < 0.05。

注6 高校生は高1～3生。

学歴と就業形態の関連性をみておこう（表1）。短大・大学卒のほうが専業主婦である比率が高く、どの学校段階でも χ^2 検定により 0.1% 水準で統計的に有意な関連性がある。また、常勤かアルバイト・パートかという違いについては、それほど大きな違いではないが、短大・大学卒で常勤である傾向を認めることができる。

「時間の使い方についてルールを決める」かどうかと母親の学歴との関係をみてみよう（表2）。まず男女計で学校段階ごとの特徴をみると、小学生では全体の 58.6% がルールを決めている。学校段階が上がるにつれて、その比率は減少し、中学生で 47.0%、高校生で 33.6% となっている。全体での比率が減少するとともに、母親の学歴による差異が明確になる。母親が短大・大学卒のほうがルールありとする比率が高い。母親の学

歴とルールの有無との関連性は、 χ^2 検定により、小学生では有意ではないが、中・高校生では 1% 水準で有意である。

男子と女子では、帰宅時間など時間の使い方についてのルールの厳格さが異なることも考えられるだろう。女子のほうが、より厳しい時間ルールのもとで生活していることも予想される。そこで男女別にみると、実は、どの学校段階でも、女子よりも男子のほうが「ルールがある」とする比率が高い。子どもが回答している調査であるため、客観的な「ルールの有無」とは微妙にズレがあるのかもしれない。男子のほうが遊びに夢中になるなどして帰宅が遅くなり、叱られる頻度が高いためにルールの存在を強く感じている可能性もある。

表3 母親の就業形態と時間の使い方についてのルール(ありの比率)

(%)

学校段階	母親の就業形態	男女計	男子	女子
小学生 (2,237)	常勤	56.7	67.6	47.4
	アルバイト・パート	58.2	65.6	51.6
	専業主婦	61.4	65.3	57.8
	全体	58.7*	66.1	52.2**
中学生 (3,021)	常勤	46.8	55.4	39.9
	アルバイト・パート	45.5	51.3	40.8
	専業主婦	51.3	60.1	43.5
	全体	47.3*	54.8*	41.2
高校生 (2,250)	常勤	30.5	34.3	27.5
	アルバイト・パート	34.9	38.0	32.3
	専業主婦	35.9	39.5	32.5
	全体	33.6	37.2	30.6

注1 就業形態については、「その他」[無回答・不明]を除外して分析した。

注2 性別が「無回答・不明」を除外して分析した。

注3 「時間の使い方についてルールを決める」の設問に対して、「よくある」「ときどきある」を「あり」に、「あまりない」「まったくない」を「なし」として分析した。

注4 ()内はサンプル数。

注5 **p < 0.01, *p < 0.05。

注6 高校生は高1~3生。

母親の学歴との関連で言えば、小学生では男女とも母親の学歴との関連性はない。中学生では女子のみが母親の学歴と関連しており(5%水準)、高校生では男女とも母親の学歴との関連性がある(男子は5%水準、女子は1%水準)。中学生女子や高校生では、短大・大学卒の母親がとくに時間ルールに厳しいというよりも、高卒までの母親が時間ルールに対して緩やかであり、そのために差異が生じていると言えるだろう。

次に、表3を用いて、母親の就業形態と時間の使い方についてルールの有無との関連をみてみよう³⁾。男女計でみると、どの学校段階でも専業主婦の母親でルールありの比率がもっとも高くなっているが、統計的に有意な関連性があるのは小学生と中学生である。高校生になると、とくに常勤の母親は子どもの時間ルールについては、さほど注意を払わなくなるようである。

男女別にみると、母親の就業形態と時間の使い方についてのルールの有無との間に有意な関連性があるのは、小学生女子と中学生男子のみであることがわかる。小学

生女子で常勤の母親は時間ルールを強く認識させない傾向にある。自分自身が仕事から帰宅する時刻が遅く、子どもの帰宅など時間ルールを「監視」できないのかもしれない。また、女子の場合は、働いている母親の負担にならないよう、母親から言われたからではなく、自発的な時間ルールを守っている可能性もある。中学生男子では、専業主婦の母親が時間ルールをとくに強く認識させているようである。そのため、統計的に有意になっていると考えられる。

時間ルールの有無は、母親の就業形態よりも学歴と、より強く関連していることがわかった。ただし、母親の学歴の影響は学校段階が上がるほど強くなる。大多数の子どもが時間ルールを認識している小学生では学歴の影響はみられない。これは、短大・大学卒の母親が厳しいというよりも、子どもの成長とともに時間ルールを緩和していく程度が母親の学歴によって異なるとみたほうがよいだろう。

第2節 行動時間に与える影響

時間の使い方についてのルールの有無だけでなく、母親が「勉強しなさい」「お手伝いをしなさい」などと言うことによって、子どもの活動は少なからぬ影響を受ける。本節では、こうした影響がどのようなものであるかをみていくことにする。なお、ここでは全体平均時間を用いる。その行動をする子どもが多く、かつその行動時間が長くなれば、全体平均時間は長くなる。逆に、その

行動をする子どもが少なく、行動時間が短ければ全体平均時間も短くなる。また、少ない子どもが長時間行動していても、全体平均時間は、やはり短くなる。こうした特徴から、母親の学歴によって、集団としての子どもたちにどのような行動を奨励しているかをうかがうことができる。

小学生の行動については「その他」を含めて27種類

第8章 子どもの生活時間に与える母親の影響

が用意されている。中学生については28種類、高校生については29種類である。そのうち、母親が高卒までであるか、短大・大学卒であるかによって、全体平均時間が5%水準以上で統計的に有意に異なる行動は、小学生で11種類、中学生11種類、高校生11種類であった。どの学校段階でも11種類の行動について全体平均時間が異なる点は興味深い。

表4～表6には、学校段階ごとに、これらの行動時間を示してある。学校段階別にみていこう。小学生では、短大・大学卒の母親で子どもの行動時間が長くなっているのは、移動、勉強（学校の宿題以外）、学習塾、習い事・スポーツクラブの4種類である。移動時間が長いのは、学習塾や習い事に通うためだろう。このために、放課後に学校ですごす時間や、室内での遊び、テレビ・DVD、携帯電話・スマートフォン・パソコンなどを使う、家族と話す・すごす時間や家の手伝い、買い物の時間が短くなっていると考えられる。学習関連の時間が長く、いわゆる「教育ママ」の家庭が想像される。

中学生でも、小学生と同様に、短大・大学卒の母親のほうが「教育ママ」的であることがわかる。短大・大学

卒の母親を持つ中学生は、高卒までの母親を持つ中学生と比べると、睡眠時間がやや短く、通学にかかる時間が長い。私立中学への通学と関連しているのだろうか。また、部活動、勉強（学校の宿題以外）、学習塾が長く、遊びやメディア接触、家の手伝いの時間が短くなっている。移動時間が長いのは学習塾との関連だろう。短大・大学卒の母親の影響が、学習関連の時間だけでなく、部活動の時間も長くする傾向にある点については、注意が必要である。

高校生になると、短大・大学卒の母親を持つと、高卒までの母親よりも学習関連の時間が長くなる傾向が、より明確になる。中学生では有意ではなかった学校、学校の宿題でも0.1%水準で有意となっており、明らかに学習活動にあてる時間が長くなっている。逆に、睡眠、テレビ・DVD、本・新聞、携帯電話・スマートフォン・パソコンなどを使う、友だちと話す・すごす、家の手伝い、アルバイト、では、高卒までの母親を持つ子どもで行動時間が長くなっている。これは、高卒までの母親を持つ高校生が、相対的には、メディア接触や働くことに比重をかけつつあることを示唆するのかもしれない。

表4 母親の学歴と全体平均時間（小学生）

(分)

母親の学歴	移動***	放課後に学校ですごす**	室内での遊び**	勉強(学校の宿題以外)***	学習塾***	習い事・スポーツクラブ**	テレビ・DVD**	携帯電話・スマートフォン・パソコンなどを使う*	家族と話す・すごす**	家の手伝い*	買い物*
高卒まで	14.5	12.0	11.8	15.4	16.6	28.3	56.0	10.0	14.5	4.9	2.5
短大・大学卒	18.6	8.3	8.7	23.6	30.8	34.9	48.6	7.3	11.8	3.6	1.4
全体	16.5	10.2	10.3	19.5	23.7	31.6	52.3	8.7	13.2	4.2	2.0

表5 母親の学歴と全体平均時間（中学生）

(分)

母親の学歴	睡眠*	食事*	通学***	移動**	部活動*	屋外での遊び・スポーツ*	勉強(学校の宿題以外)***	学習塾*	テレビ・DVD***	携帯電話・スマートフォン・パソコンなどを使う***	家の手伝い*
高卒まで	445.5	58.1	46.8	11.2	49.4	4.3	55.9	43.2	48.9	31.8	4.1
短大・大学卒	440.3	60.3	51.5	14.1	54.4	2.6	66.0	49.3	39.4	23.0	3.0
全体	443.0	59.1	49.0	12.5	51.8	3.5	60.7	46.1	44.4	27.7	3.6

表6 母親の学歴と全体平均時間（高校生）

(分)

母親の学歴	睡眠*	学校***	学校の宿題***	勉強(学校の宿題以外)***	学習塾・予備校***	テレビ・DVD***	本・新聞*	携帯電話・スマートフォン・パソコンなどを使う***	友だちと話す・すごす*	家の手伝い*	アルバイト***
高卒まで	403.7	442.3	27.1	40.2	16.9	45.6	3.3	49.2	11.4	4.4	18.0
短大・大学卒	394.3	455.5	34.3	62.6	35.4	34.6	2.2	36.3	7.3	2.5	6.3
全体	399.5	448.1	30.3	50.1	25.1	40.7	2.8	43.5	9.6	3.6	12.8

注1 母親の学歴については「お母さん（またはお母さんに代わる人）は大学や短期大学を卒業している」に○をつけた場合には「短大・大学卒」、そうでない場合は「高卒まで」とした（表4～表6）。

注2 ***p < 0.001, **p < 0.01, *p < 0.05（表4～表6）。

注3 高校生は高1～3生。

第3節 ディストレスと母親との関係

子どもたちの生活が多忙化しており、ディストレスを感じる子どもが少なくないことが指摘されている。ここでは、ディストレスに着目し、母親からどのような影響を受けているのかを検討していく。

調査では9項目のディストレスについて質問している。具体的には、「疲れやすい」「いらいらする」「やる気が起きない」「忙しい」「何となくさびしい」「気分が落ち込む」「自分に自信が持てない」「肩がこる」「食欲がない」である。これに対して、「とても感じる」「わりと感じる」「あまり感じない」「まったく感じない」の4段階で回答してもらっている。

図1は、4段階の回答のうち「とても感じる」「わりと感じる」の合計比率を、学校段階ごとに示したものである。ほとんどのディストレスについて、学校段階が上がるほど感じる比率が高くなっていることがわかる。とくに感じている比率が高い項目は、「疲れやすい」と「忙しい」で、生活時間や生活パターンに関連していると思われることができる。

これらの項目のなかで、やや例外的なのは、「いらいらする」と「やる気が起きない」の2項目である。「いらいらする」は中学生でもっとも高い。「やる気が起きない」は、中学生で大幅に増加するが、高校生での増加はほとんどない。

第1節では母親の学歴によって中・高校生で時間の使

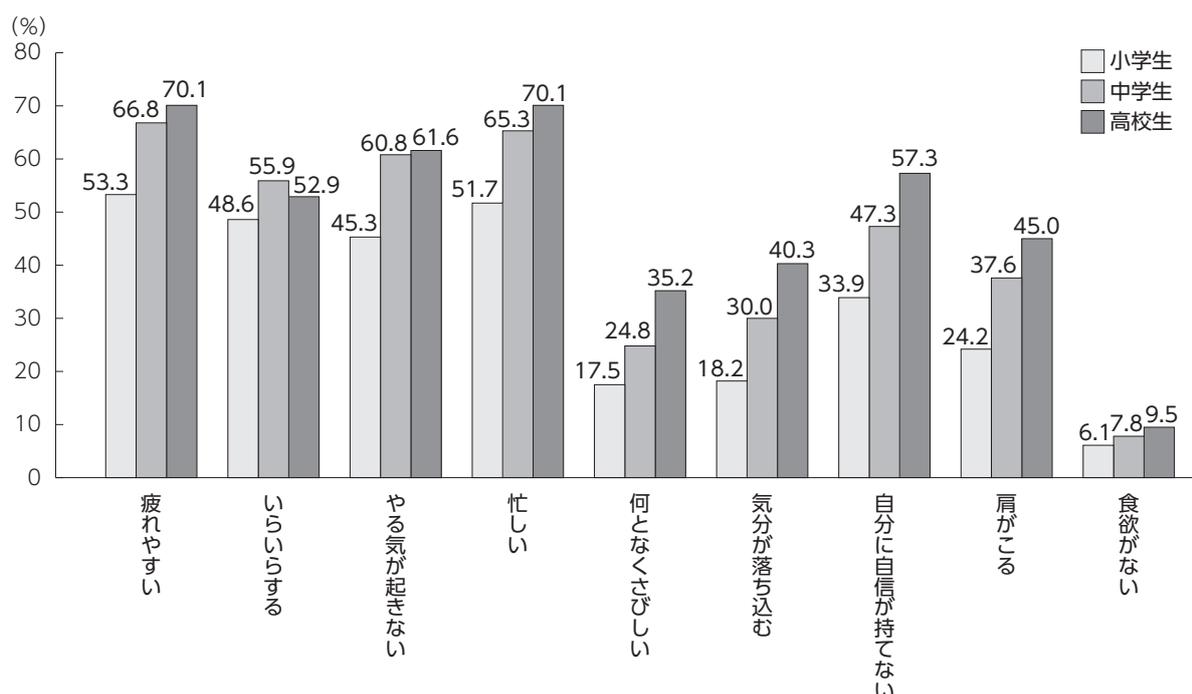
い方についてのルールの有無が異なることをみた。短大・大学卒の母親を持つ子どものほうが、時間ルールの存在を認識しており、学校段階が上がるほど、その傾向は明確になる。また、第2節でみたように、母親の学歴によって全体平均時間が異なる行動があり、短大・大学卒以上の母親では学習時間が長くなっていた。また、この傾向も、学校段階が上がるほど強くなっていた。こうしたことから、母親の学歴と子どもたちのディストレスにも、何らかの関係があると考えられることができる。

図2～図4は、学校段階別に母親の学歴とディストレスとの関連をみたものである。それぞれの項目についてみていこう。

「疲れやすい」については、中学生のみ、 χ^2 検定により母親の学歴との間に統計的に有意な関連性がある(1%水準)。短大・大学卒の母親を持つ中学生の64.7%が「疲れやすい」としているのに対して、高卒までの母親を持つ中学生では68.8%が「疲れやすい」と回答しており、後者のほうで比率が高くなっている。中学生は高校受験を控えており、勉強したくなくてもしなくてはならない。その「勉強圧力」のようなものが高卒までの母親のほうが強く、そのために疲れやすくなっているのかもしれない。

「いらいらする」は高校生でのみ統計的に有意である(5%水準)。高卒までの母親を持つ高校生で54.5%、

図1 子どもたちのディストレス(学校段階別)



注1 「とても感じる」+「わりと感じる」の%。

注2 無回答・不明を除外して分析した。

注3 高校生は高1～3生。

短大・大学卒の母親を持つ高校生で50.8%である。「疲れやすい」と同様に、高卒までの母親を持つ子どものほうがディストレスを感じる比率が高くなっている。

「やる気が起きない」はすべての学校段階で母親の学歴との関連が統計的に有意である。小学生で5%水準、中学生で0.1%水準、高校生では5%水準で有意である。小学校では高卒までの母親で47.1%、短大・大学卒の母親で43.6%となっており、高卒までの母親を持つ子どものほうが多くディストレスを感じている。中学生も同様に、高卒までの母親で64.3%、短大・大学卒の母親で56.9%となり、母親の学歴によって、かなりの比率の違いが生じている。高校生でも、高卒までの母親で63.5%、短大・大学卒の母親で59.3%が「やる気が起きない」と回答している。

「忙しい」も、すべての学校段階で、母親の学歴と統計的に有意な関連性がある。小学生では1%水準、中学生では0.1%水準、高校生では1%水準となっている。ここまでみてきた項目とは異なり、「忙しい」は短大・大学卒の母親を持つ子どものほうが感じる比率が高い。小学生では、高卒までの母親で48.9%、短大・大学卒の母親で54.6%である。中学生では、高卒までの母親で62.6%、短大・大学卒の母親で68.3%、高校生では高卒までの母親で67.6%、短大・大学卒の母親で73.2%となっている。

第2節でみたように、高校生では、短大・大学卒の母親を持つ場合、さまざまな形態での学習時間が長い傾向があった。7時間以上にわたる学校での学習を終えて、学習塾に行き、帰宅して宿題とそれ以外の勉強をすると、かなりの多忙感を感じることは容易に想像できる。短大・大学卒の母親を持つ子どもたちは、こうした生活を当然のようにして送っているのかもしれない。

「何となくさびしい」は、感じている比率はそれほど高くはないが、中学生と高校生では1%水準で有意になっている。中学生では、高卒までの母親で26.8%、短大・大学卒の母親で22.5%がディストレスを感じている。高校生では、高卒までの母親で37.3%、短大・

大学卒の母親で32.4%である。この項目については、高卒までの母親を持つ子どものほうが、短大・大学卒の母親を持つ子どもよりも、ディストレスを感じる比率が高い。

「気分が落ち込む」も、小・中学生では統計的には有意ではないものの、高卒までの母親を持つ子どもで感じる比率が高い。高校生では1%水準で有意であり、高卒までの母親で42.5%、短大・大学卒の母親で37.6%となっている。

「自分に自信が持てない」は、小学生で1%水準、中学生では0.1%水準で母親の学歴と有意な関連性があるが、高校生では有意ではない。小学生では高卒までの母親で36.7%、短大・大学卒の母親で31.0%が「自分に自信が持てない」と回答している。高卒までの母親を持つ子どものほうが、よりディストレスを感じていることになる。

「肩がこる」については、すべての学校段階において5%水準で有意な関連性がある。小学生では、高卒までの母親で22.6%、短大・大学卒の母親で25.9%が「肩がこる」としており、短大・大学卒の母親を持つ子どものほうが、その比率がやや高くなっている。中・高校生も同様の傾向にある。中学生では、高卒までの母親で36.0%、短大・大学卒の母親で39.3%となっている。高校生では、高卒までの母親で43.3%、短大・大学卒の母親では47.1%がディストレスを感じている。

「食欲がない」は、ここでの9項目のディストレスのなかでは、感じている子どもたちがもっとも少ない。ただし、中・高校生では、母親の学歴との間に統計的に有意な関連性がある(中学生5%水準、高校生1%水準)。中学生では、高卒までの母親で8.8%、短大・大学卒の母親で6.8%である。高校生では、高卒までの母親で11.0%、短大・大学卒の母親で7.5%となっている。「食欲がない」についても、高卒までの母親を持つ子どものほうが、より多くディストレスを感じていることがわかる。

図2 小学生のディストレス

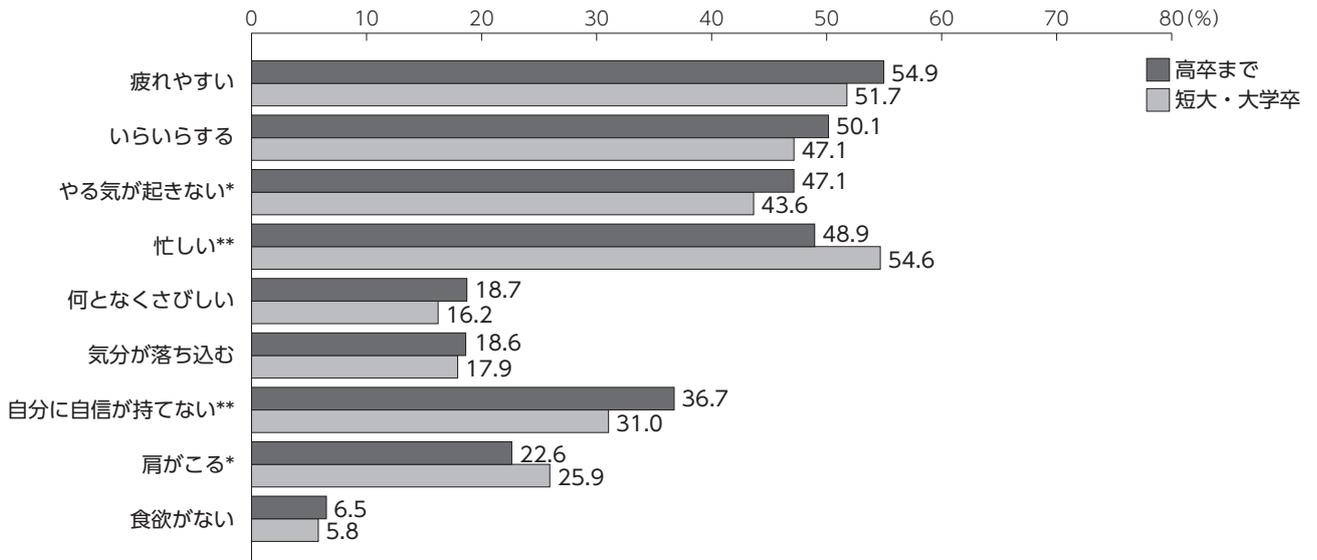


図3 中学生のディストレス

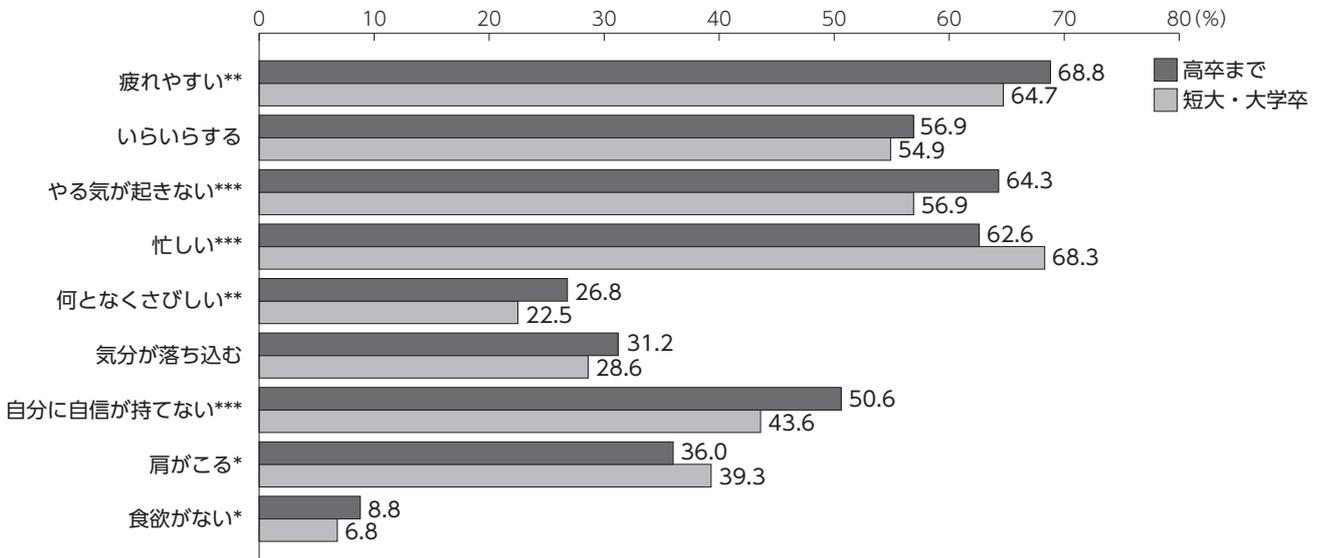
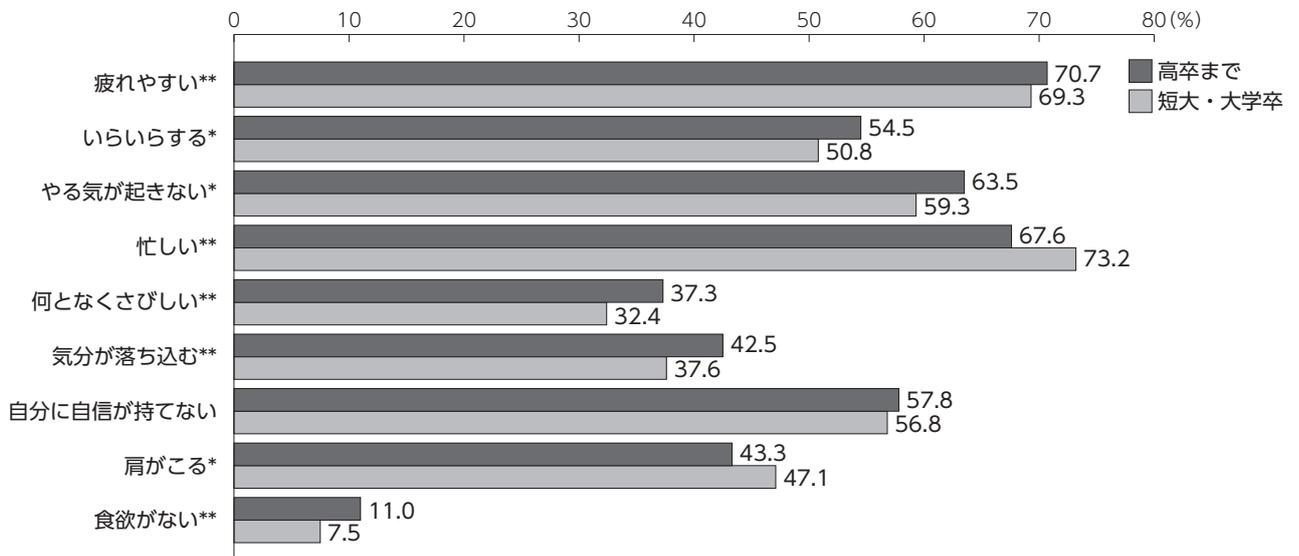


図4 高校生のディストレス



注1 「とても感じる」 + 「わりと感じる」の% (図2~4)。
 注2 無回答・不明を除外して分析した (図2~4)。
 注3 ***p < 0.001, **p < 0.01, *p < 0.05 (図2~4)。
 注4 高校生は高1~3生。

ここまで9項目のディストレスについてみてきたが、学校段階によって違いはあるものの、大きくまとめれば、短大・大学卒の母親を持つ子どものほうがディストレスを感じる比率が高いのは、「忙しい」と「肩がこる」の2項目である。その他の項目については、高卒までの母親を持つ子どものほうが感じる比率が高くなっていった。学習関連の時間が長く、遊びの時間を持つことができず「忙しい」と感じている短大・大学卒の母親を持つ子どもたちが、必ずしも、さまざまなディストレスを抱えているわけではない点が着目される。

ただし、ここで注意しなくてはならないのは、ここでみた関連性が、母親の学歴による直接的な効果ではない点である。例えば、第1節でみたように、短大・大学卒の母親では、専業主婦である比率が、高卒までの母親よりも高くなっていった。母親が常に家にいることで、ディストレスが軽減される子どももいれば、反対に増幅される子どももいるだろう。そして、その傾向は学校段階によっても異なると考えられる。あるいは、母親の学歴によって父親の学歴や職業、生活の豊かさも異なっており、そのことが子どもたちのディストレスのあり方に影響を与えているはずである。これらの要因も考慮する必要がある。

そこで、ここでは、すべての学校段階で母親の学歴と

有意な関連性があった「忙しい」をとりあげて、回帰分析を行ってみよう。4段階の回答のうち、「とても感じる」「わりと感じる」を「感じる」に、「あまり感じない」「まったく感じない」を「感じない」に統合して従属変数とし、2項ロジスティック回帰分析を行った。独立変数は、学校段階、性別、母親の学歴、父親の学歴、母親の就業形態、時間の使い方についてのルールの有無である。結果を表6に示した。

まず学校段階についてみると、小学生に対して、中・高校生で「忙しい」と感じやすくなっていることがわかる。どちらも0.1%水準で有意である。また、性別では、男子では有意に忙しいと感じない(女子のほうが忙しいと感じやすい)。母親の学歴は10%水準であるのに対して、父親の学歴が0.1%水準で有意になっており、父親が大学卒であると忙しいと感じやすい。日本では、同じ学歴で結婚する学歴同類婚が多いことが知られている。母親の学歴とディストレスには直接的な関係はそれほど明らかではなく、父親の学歴の直接的な影響のほうがはっきりと示されている。母親の就業形態は有意ではない。さらに時間の使い方についてのルールも0.1%水準で有意であり、ルール「有」の場合には忙しいと感じやすくなっている。

表6 「忙しい」の規定要因

		B	Exp(B)
学校段階 (基準:小学生)	中学ダミー	0.599 (.058)	1.820***
	高校ダミー	0.832 (.065)	2.297***
性別 (基準:女子)	男子ダミー	-0.151 (.049)	0.860**
母親の学歴 (基準:高卒まで)	大卒ダミー	0.097 (.056)	1.102+
父親の学歴 (基準:高卒まで)	大卒ダミー	0.305 (.056)	1.357***
母親の職業形態 (基準:アルバイト・パート)	常勤ダミー	-0.001 (.057)	0.999
	専業主婦ダミー	0.032 (.061)	1.032
時間の使い方についてのルール (基準:なし)	有ダミー	0.200 (.050)	1.222***
		-2対数尤度	9581.547
		Nagelkerke R2乗	0.045

注1 「忙しい」の設定に対して、「とても感じる」「わりと感じる」を「感じる」に、「あまり感じない」「まったく感じない」を「感じない」に統合して分析した。

注2 ***p<0.001, **p<0.01, *p<0.05, +p<0.1。

注3 サンプル数は7,439名。

注4 高校生は高1~3生。

まとめにかえて

生活時間研究は、誰もが平等に与えられている1日24時間という時間資源を、人々がどのように利用しているかを明らかにする。ただし、従来の生活時間研究は、成人を対象とする調査が主体で、子どもを対象とするものは少なかった。総務省統計局が1976年以来、5年ごとに実施している生活時間調査である「社会生活基本調査」では、10歳以上の子どもについても調査そのものは行われているが、子どもを中心とした分析による成果は、とくにあげられてはいない。

一方で、家族と教育については、教育格差が問題となっていることもあって、これまでも多くの研究が行われてきており、現在も行われつつある。これらの研究は、親の持つ経済的資源や文化資本、学歴資本などが、子ども

の教育達成にどのような影響を持つかを明らかにしてきた。けれども、子どもの生活時間調査が極めて少ないこともあって、時間資源については、とくに計量的研究においては、ほとんど扱われることがなかった。

本章でみてきたように、時間資源の使い方は教育と深くかかわっている。学校外教育のように経済的資源が時間資源の利用を促進する活動があれば、経済的資源とは無関係に時間が利用される活動もある。家庭における教育のあり方を明らかにする上で、時間資源に着目することは意義があるだろう。こうした研究は、まだ端緒にいたばかりであるが、少しずつ成果を蓄積していくことが期待される。

-
- 1) ただし、本田(2008 p27)は、日本では母親による「家庭教育」の実態に踏み込んだ質的研究については、あまり多くの蓄積はないとしている。
 - 2) 母親の就業形態については、「その他」「無回答・不明」を欠損値としたことから、就業形態を用いた分析では学歴を用いた場合よりもケース数が減少する。このため、就業形態に関連した知見については、参考程度としたい。
 - 3) 注2)を参照のこと。

<参考文献>

- 神原文子・高田洋子編 2000 『教育期の子育てと親子関係』ミネルヴァ書房
 本田由紀編 2004 『女性の就業と親子関係』勁草書房
 本田由紀 2008 『「家庭教育」の隘路 子育てに強迫される母親たち』勁草書房